

山田吉彦さん

(東海大学海洋学部教授)

日本人の未来は、海と共にある

三月十一日の大地震で津波は深刻な原発事故をも引き起こしてしまった。また、国境の海をめぐっては、近隣国との緊張関係が続いている。これから日本人は、海とどのように付き合っていけばよいのだろうか。

日本の海が秘める可能性

——山田先生は、「海洋国家である日本の未来は、海と共に生きることにより明るい」と発言され続けてきました。しかし、大地震で国土は津波災害に見舞われ、原発事故まで引き起こされました。これから日本人と海との関わり方は、どのように変わっていくのでしょうか。

日本人は、海と共に生きてきた——。私たちは、三月十一日を契機に、その現実とあらためて向き合うこ

とになりました。

歴史を振り返れば、日本の沿岸が何度も津波に襲われたのは分かっていたはず。それなのに対処ができなかった。つまり海洋国家としての責任を果たせていなかったということです。

海は大きな恵みをもたらしますが、同時に計り知れないエネルギーで人間の生活を脅かします。そういういた自然災害をも含めて、日本人はもつと海に関心を持ち、理解しなければなりません。

海をいかに利用するかは、昔から日本人にとつての大きなテーマでした。日本の海は広い。領海と、経済

的な権益を持つ「排他的経済水域」を足した「日本の海」の広さは、世界で六番目。これは中国が持つ海の約五倍にあたります。海水の体積では、世界第四位。この日本が保有する広大な海が持つ資源は、「眠れる宝の山」といっていいものです。

——日本の海に眠る資源とは、具体的にどのようなものでしょうか。

一般的に、資源とは「開発可能で有効利用できる物

質」の総称です。資源を開発するには、量的にまともな存在すること、存在する場所がよいこと、経済性が見込めることが必要な条件になります。

この条件を海洋という観点から見ると、「海底資源」「海洋資源」「水産資源」の三通りに区分できます。

第一の「海底資源」について考えてみると、日本近海には、まずイラク油田に匹敵する一〇〇〇億バレルの埋蔵量があるとかつて試算された東シナ海のガス油田があります。

また日本近海の水深四〇〇メートルから一六〇〇メートルの比較的浅い海域に、金、銀、銅などの貴金属を大量に含んだ「海底熱水鉱床」が存在していることが分かっています。

さらに水深三〇〇メートルを超える海底には、メタンハイドレードと呼ばれるシャーベット状になったメタンが層をなして分布しています。メタンハイドレードには、日本の天然ガス消費量に換算すると約九十四年分のメタンがあると見る見方もあり、採取するための実験が進行中です。

また海底には、マンガンを主成分とした多金属団塊「マンガン団塊」というものがあります。このマンガ



●やまだ・よしひこ 1962年千葉県生まれ。東海大学海洋学部教授。博士(経済学)。海洋政策研究財団客員研究員。学習院大学卒業後、金融機関を経て日本財団に勤務。海洋船舶部長、海洋グループ長を歴任。勤務の傍ら多摩大学大学院修士課程を経て埼玉大学大学院経済科学研究科博士課程修了。著書に『日本は「海」から再生できる』など。